

生徒の「分からない」から始まる あたたかな授業づくり、クラスづくり

横浜国立大教育人間科学部教授、教育人間科学部附属教育デザインセンター長 高木展郎

新課程が全面实施となつて1年が過ぎた。新課程のねらいを実現するために、今求められている学習観は何か。また、その具現化のために、発想をどのように変えていけばよいのか。横浜国立大教育人間科学部の高木展郎教授に聞いた。

新課程1年目を終えて

教師自身の原体験に依拠した 授業からの脱却が必要

教育観・学習観は人それぞれですが、多くはその人の原体験に基づいてつくられているものだと思います。教育の専門家ではなくても、自分が受けてきた教育を基に、教育のあり方を評論してしまいがちです。それは教師も同じで、自分が受けてきた教育を基にした教育観からなかなか脱却できません。

中学校で新課程が全面实施となり1年が経ちましたが、学校で授業を拝見していると、まだ知識注入型の授業が少なくない印象を受

けます。中学校の学習指導要領は1947年に初めて作成されてから改訂を何度も重ね、学習観は時代に応じて変化してきました。しかし、いくら学習指導要領を変えても、教師が自己の原体験から脱却した指導を行わなければ、教育現場は変わりようがありません。

2007年に学校教育法が改正されて、戦後初めて「学力」の定義がなされました。基礎的・基本的な知識・技能、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、そして、主体的に学習に取り組む態度。この3つがこれからの時代に求められる「学力」として、授業で何をすべきかを考えていかなければなりません。少なくとも

知識注入型の授業では、学習指導要領のねらいを達成することは出来なくなっているのです。

「高度な専門職」に就く教師として 今求められる学力を見極める

日本の教師は優秀で、授業の質は高く、しかも熱心です。これは今も昔も変わらない、日本の教育の優れた特質です。しかし、学校を取り巻くさまざまな状況が、そうした特質を生かすことを妨げているのも事実です。

例えば、中学校の教師である以上、高校入試は意識せざるを得ません。しかも、授業時間は限られていますから、責任感の強い教師

主体的に取り組む言語活動の工夫



たかぎ・のぶお◎横浜国立大教育学部卒。兵庫教育大大学院学校教育研究科言語系修了。東京都公立中学校教諭、神奈川県立高校教諭、筑波大学附属駒場中学・高等学校教諭、福井大、静岡大を経て現職。著書に『ことばの学びと評価』（三省堂）など。専門分野は教育方法学、国語科教育学。

ほど、皆で考えたり表現したりする場面が大切であることを理解しつつも、教科書の内容を全て教えることに力を注いでしまっている傾向があります。また、保護者にも、「教科書を全て終わらせるのが良い先生」という思い込みがあるようです。

更に、公立中学校が抱える課題に、中学校入学時の生徒の学力差があります。小学校段階で既に学力が開いているために、小学校の学習内容も振り返りながら教える必要があります。授業ではどうしても基礎的な知識や技能を教えることが中心になってしまおうという声を聞きます。

しかし、高校入試も変わりつつあります。

例えば、13年度の神奈川県公立高校の入試問題を見ると、理科にはグラフを描かせる問題があり、社会も自分の知識を基に考え、判断し、表現させる問題が出されました。高校入試でも、これまでのようなたくさんの知識を問う問題だけではなくなりつつあるのです。

私は、教師という職業は「高度な専門職」だと考えます。これまでの学校は、知識を効率的に伝授する場としては優れていました。しかし、社会で必要とされる力が変わり、学校教育で育てるべき力が変わった今、これまでも同じ授業では求められる力は育成できません。教師という専門職の立場から、これからの社会を生きていく生徒に必要なことを

しっかりと見極め、授業に具体化することが大切なのです。

主体的な活動を促す

学校は「分からない」を「分かる」ようにする場所

今求められる教育へと転換するために、まずは授業の発想をがらりと変えてみてはどうでしょうか。

例えば、挙手の仕方です。発問をして、「分かった人は手を挙げて」と言う先生は多いと思います。ところが、分かる生徒ばかりに発言させたり、黒板に書かせたりしていると、分からない生徒は黙って座っているだけで、学びの時間にはなっていない。生徒にしてみれば、それはただの苦痛でしかなく、学力や学ぶ意欲の差は広がるばかりです。

授業は学ぶ場であり、分からないことを分かるようにする場所です。ですから、授業では「分からない人、困っている人は手を挙げて」と生徒に投げ掛ける方がよいと思います。すぐには生徒の手は挙がらないかもしれませんが、それでも、教師が粘り強く「授業は分からないことを分かるようにする場だ」と伝えていくことで、生徒は少しずつ安心して手を挙げるようになっていきます。

では、「分からない」生徒が「分かる」ようになるためには、どうすればよいのでしょうか。その手立ての1つが、新課程で重視さ

*プロフィールは2013年3月時点のものです

れている言語活動だと考えます。生徒同士でグループやペアをつくり、授業で学んだことを話し合う機会を設ける。あるいは、分からない生徒に挙手をさせ、どこまで理解している、どこから分からないのかを説明させるのもよいと思います。

こうして生徒が話し合っている間、教師は机間指導をしながら、どの生徒がどこまで理解できているのか、どこでつまづいているのかを把握することが出来ます。長い時間を取る必要はありません。目的を明確にして言語活動を取り入れることによって、生徒の疑問を拾い上げることが出来ます。そして、全体の場でその疑問に答えていけば、どの生徒も「分かる」授業になるのではないのでしょうか。

学習の本質に迫る授業で 生徒の興味を喚起

言語活動として、学び合いを行う場合はいくつかの注意が必要です。分かる生徒が分からない生徒に教える形ばかりにしていると、「教える側」「教わる側」という関係が固定化しがちです。もちろん、学び合いでは、自然と出来る生徒が教える場面が多くなります。それがあまり一方的にならないように、時には、出来る生徒にも分からないような問いを投げ掛け、皆が分からないという状態にするのです。誰も分かる人がいなければ、「みんなで一緒に考えてみよう」と話し合いにもつ

ていきやすくなります。

また、成績のよい生徒でも、単に公式を丸暗記しているだけで、本質を理解していないことがよくあります。数学などでは、正解に導く方法を考えるだけでなく、「なぜこの公式を使うのか」という本質に踏み込むことも必要です。分かったつもりになっている生徒も、実はきちんと理解していないということが認識できれば、より主体的に学習に取り組むはずで。

生徒が話し合いのイメージを持っていないのであれば、生徒に他のクラスの授業を参観させたり、先生方が行われている研究授業や事後研究会に生徒を参加させたりするのも良いと思います。他クラスや他学年の生徒がどのように学んでいるのかを間近に見て「学び方を学ぶ」ことも、大きな刺激となり、生徒が自ら学習に取り組む動機付けになることでしょう。

「あたたかな聞き方」と 「やさしい話し方」を教える

話し合いを行うにしても、自分の考えがなければ活発な交流は望まれません。話し合いの前に、生徒一人ひとりが自分の考えを持つための時間を設けることも不可欠です。

私は、活動前に「1人学び」の時間を設けるのがよいと考えています。話し合いに入る前に、教師が生徒に問いを投げ掛け、ノート

に各自の考えを書かせる。教師は机間指導をして一人ひとりのノートを見ながら、「よいことが書いてあるから後で発表してごらん」「この考え方は、こういう意見が出た後に言うといいよ」というように声を掛けていくのです。この個別指導での声掛けが、生徒同士の活発な交流を促す上で重要です。

もう一つ、生徒同士の交流を活発化させるために大切なことがあります。全ての生徒が積極的に自分の考えを述べたり、分からないことを分からないと言えたりするようなクラスづくりです。それは、教室を生徒が安心していられる居場所にするということでもあります。

そのためには、「あたたかな聞き方」と「やさしい話し方」を教える必要があります。分からないまま教室に座っているつらい気持ち、友だちの前で「分からない」と言うことにどれだけ勇气があることか。みんなで分かるようにするのが本当の友だちであること、生徒に伝えましょう。他の生徒の意見を受容・共感し、尊重する姿勢を養うことは道徳教育としても重要です。

それと並行して、分からないという生徒にも自己肯定感を持たせることが大切です。「分からないことを言えるって、すごいよね」というように、自分が「分からない」と言ったから、今日の授業が出来たということに気付かせるのです。そして、分からないと言うの

主体的に取り組む言語活動の工夫

は良いことであるという意識を、クラス全体、学校全体で共有してください。教師がチームとなって、同じ価値観で生徒と接することで相乗効果も一層高まるはずですよ。

新たな教育課程の編成

知識と活動のバランスの取れた教育課程が重要

言語活動を充実させる一方、知識・技能の習得もおろそかにしてはいけません。限られた授業時数の中で、教えるべき知識は教え、なおかつ十分な活動を取り入れるためには、生徒の実態に合わせて教育課程を工夫する必要があります。

ある単元に10時間充てるとして、7時間は教科書やプリントで知識を教える、3時間は生徒が考える活動を入れるというように、教科ごとに年間計画を立てておくのです。新課程は恐らくあと9年は続くわけですから、研究授業や週案など、この1年の成果と反省を踏まえて、今こそ各教科が年間の教育課程としての教育計画を立てると良いと思います。生徒たちが考える活動が苦手だと思えば、考える時間をたくさん取り、知識がたくさんあると話し合いが活発になると判断するならば、知識を教える時間を多めに取るというように、バランスを考えた教育課程を編成することが大切です。ただし、知識が足りないから一斉授業、み

んな覚えたから話し合いをするというように、単純に時間を振り分ければよいというものではありません。話し合いを進める中で、知識が足りないために議論が停滞する場面があったら、「ここでちょっと調べてみよう」と言って知識を教えるのです。生徒自身も話し合いの中で知識不足を感じているはずですから、意欲的・主体的に学ぼうとするでしょう。知識の習得と言語活動はあくまで「車の両輪」であることを忘れてはなりません。

言語活動の評価

言語活動は思考力・判断力・表現力を高めるための手段

指導計画を立てる際には、評価も一体的に行えるように留意することが大切です。「授業のこの部分では4観点のうちの『思考・判断・表現』をみよう」「この時間は評価は必要ない」といった見極めが大切です。

ただし、言語活動はあくまで、記録、要約、説明、論述、討論といった諸活動を通して、先に述べた学力（知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体的に学ぶ力）を育成するための「手段」です。

例えば、言語活動の中で活発に発言しているからといって、それを「表現力」として評価するのは禁物です。「積極的に発言している」「覚えたことを上手に説明している」ことを、表現力とはいいません。それは、あく

までも言語活動を通じた学力習得のためのプロセスに過ぎないのです。

自分で考えたり判断したりしたことを、自分の言葉でアウトプットできて、はじめて表現力というのです。説明、論述、討論等の言語活動を通して評価するのは、あくまで4観点の1つである「思考・判断・表現」であり、言語活動自体は評価の対象にはならないことを忘れないでいただきたいと思います。

今日の日本の発展を支えているのは、明治以来の教育です。これまでの教育によって、日本は大きく発展してきました。しかし、グローバル化や情報化など日本を取り巻く状況が大きく変化している今、現状にとどまろうとすれば、いずれ必ず行き詰まる時が来るでしょう。未来を生きる生徒のためにも、従来の発想にとらわれず教育を変えていく勇気を教師一人ひとりが持つて、日々の指導改善に向き合っていたいただきたいと思います。

主体的な言語活動にする指導のヒント

- 生徒の「分からない」を中心とした授業づくりを行う
- 学びの本質に迫る問いを投げ掛ける
- 知識の習得や1人学びの時間を確保しながら、バランスよく言語活動を単元に組み込む